
-GUY-

TAKA丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- GUY -

【Nコード】

N4026A

【作者名】

TAKA丸

【あらすじ】

滅亡への一途を辿る人類は、犯してはならない領域に踏み込んでしまった。

序章

暗く……限らない闇が広がっている。

その中で幾億もの星々が産まれ、そして死んで行く。

それは宇宙的な見方をすれば、ほんの一瞬の煌きに過ぎない。

しかし、それでも一際強く、青く輝く星があった。

遙か昔、その星の海は赤かったと云う……。

「32番ジェネレーターが過負荷になっています」

「5番から10番の余剰分を回して、22ブロックを迂回させる」

「修理の為、作業効率が14%ダウンします」

「許容範囲内だ。次の工程で誤差を修正する」

「了解です」

真っ白なフロアの中心で全身にコードを繋がれた「彼」は、機械の台座の上で座ったまま、矢継ぎ早に出される報告を的確に処理して行く。

時にはスタッフが見落としている物までを、指摘もせずに淡々と処理してしまう。

だが……。

「……10分間のインターバルに入る……後を頼む」

プシュッと音がして、「彼」に繋がれていたコードが全て外れた。

長時間の緊張が精神を痛めつけているのだろう、ヨロヨロとした足取りで台座を降りると、「彼」は透明なガラスで仕切られた部屋を出て行った。

「くそ面白くもねえ……いちいち頭に来るぜ！」

『彼』の姿が完全に見えなくなるのを確認して、白衣姿の痩せた若い男が言った。

その陰のある表情は、決して『彼』に好意的では無い事を物語っている。

「仕方が無いだろう？ 俺達より『彼』の方が優れているんだ」
そう言った男は、先に文句を言った男とは対照的に、人の良さそうなズングリした中年の男だ。

鼻に乗せた眼鏡がズリ落ちるのを、チョコチョコと太い指で直している。

頭の方もかなり薄くなっていて、けれど、その愛嬌のある顔立ちとマツチしていて柔和な印象を与える。

「優れているだと？ ハッ！ 笑わせるな！ まだ生まれて2年しか経ってない奴の、何処が俺達より優れてるってんだ、ああ？」

「俺に当たるなよ。じゃあ訊くが、お前は400の熱に耐えられるか？ - 50の世界で冷静に作業を進められるか？」

「そんな物、スーツを着れば誰だって……！」

「全長32kmのステーションを、自分の脳とコンピューターをリンクして管理できるか？ しかも24時間、殆ど休みらしい休みも無くだ」

「……」

「それに、膨大なデータベースの記録の殆どが、あの脳には収まってるって話だ。まあ、記憶容量については互角だろうが、それを活用する……」

「もういいっ！」

苛立ちを隠そうともせず、痩せた男は椅子を蹴飛ばす様にして席を立った。

そのまま大股でコーヒーの置いてあるテーブルまで行くと、自分のカップに注ぎ、一口飲んで顔を顰めた。

「不味いコーヒーだな！ 誰かまともなコーヒーを淹れられる奴はいないのかっ！」

ズングリした男はその光景を見て、やれやれと言った風に肩を窄めた。

『彼』 は分厚い扉に護られた部屋の中にいた。

ここは中央管理局のコンピューターにアクセス出来る、このベースで唯一の場所である。

当然、そこには何十ものセキュリティシステムがあるのだが、自由な出入りを認められている 『彼』 にとって、それは何も無いのと同じだ。

【データベースにアクセスします。 パスコードを入力して下さい】
「α2899 - 1145 - ΣΖΖΟＲＱ88 - 01。 『F』 だ」
キユウウウ……と微かな機械音がして細いアームが伸び、 『彼』 の口中から細胞の欠片を採取する。

それと同時に各種センサーとカメラが、 『彼』 を360度方向から確認し始めた。

声紋、網膜パターン、対象物の身体的特徴など、ありとあらゆるデータをコンピューターが取り込んで解析しているのだ。

「いい加減、僕を覚えてくれないかな？」

【記録されているデータとの照合は必須事項です。 シークエンスの省略は許可されておりません】

「やれやれ……自由に出入りさせておいて、結局これじゃあ意味が無いじゃないか。 時間の無駄だと思っけどね」

【対象を 『F』 と確認、アクセスを許可します。 シークエンス2に移行します。 セキュリティは第45条に準拠しています】
「モニターへ転送……制限をかけて」

【了解しました。 『F』 の視界前方にのみ、転送を開始します】

『F』 とは、 『彼』 の識別コードだ。

『彼』 には名前が無い……だから 『F』 と呼ばれる。

それにどんな意味があるのか 『彼』 は知らない。

ややあつて、『彼』の目の前に青い海が広がった。
正確には『彼』が目に着けているモニターに、だ。

景色は次々に変わり、高い山や深い森、静かな湖などが映し出される。

どれもこれも、今では目にする事の無い景色ばかりだ。

「僕には、このステーションの中が世界の全て……けれど、外にはこんな世界がある……いや、あつたんだな」

【現在、ごく限られた地域にのみ存在が確認されています。 残念ながら、そこに入る為には政府の許可が必要であり、また、その資格を得る為には】

「解っているさ、そんな事くらい……説明は不要だ。 でも、ただデータを閲覧するだけの事なのに、こんなに嚴重にする必要があるのかな？」

【選ばれた者のみがその権利を有しています。 無用な興味は身の破滅を意味します】

「選ばれた者……か」

彼が少し寂しそうな声で言うのと同時に、『ピピ』と10分が経過した事を知らせる無機質な音がした。

「もう戻らないとな。 加速剤と安定剤を……」

彼の声に反応し、首の部分に剥き出しになっているソケットに壁から伸びたチューブが接続され、液体が注入される。

脳とコンピュータをリンクさせたとしても通常の反応速度では扱い切れない為、こうして強制的に反応速度を引き上げるのだ。

だが、それも『彼』にだから出来るのであつて、常人には不可能な事である。

「5時間後にまた来る」

【お待ちしております】

「その時までには僕を覚えておいてくれよ？」

【あなたのデータは既に全て記録されています】

「じゃあ、面倒な手続きは省いてくれ」

【シークエンスの省略は許可されておりません】

「石頭め……」

ブン……と微かな音がしてモニターが消えた。

そしてそれと同時に、けたたましいアラームの音がステーション内に響き渡った。

それは緊急事態を告げる音…… 「彼」 が生まれて初めて聞いた音だった。

「何だ……何が起こっている？」

微細な振動が足の裏から伝わって来る。

「……爆発!?」

『彼』 は全速力で元いた部屋へと駆け戻った。

そこでは数人の作業員が事態の收拾を図るべく必死の作業を続けていたが、既にその手に負えない物になっている事は誰の目にも明らかであった。

「まだ退避していないのか！ 既に爆発が始まっているんだぞ！ 至急シェルターへ避難するんだ！」

「うるせえっ！ 俺達に指図するんじゃないやねえっ！」

痩せた若い男は 『彼』 に指示されると、その不機嫌さを隠そうともせずに怒鳴った。

「よさないかつ！ 非常事態なんだぞ！」

「だからどうした！」

人の良さそうなズングリした中年の男は先程と同様に痩せた男を窘めるのだが、痩せた男は聞く耳を持たない。

「俺はな、こんな奴にいちいち指示されるのは、もうウンザリなんだよっ！」

「そんな事を言っている場合か！ 早くしないと逃げ切れなくなるぞ！」

熱核反応炉の暴走……それは、ほんの些細なミスだった。

作業員の一人が手順を一つ間違えた…… たったそれだけの事で、事態は深刻な方向へだけ確実に動いた。

いくら完全管理されているとは言っても、それはあくまでも『彼』がいればという前提である。

「く……さつさと何とかしやがれ！ お前は俺達より優れてるんだろっがっ！」

「事態がここまでになってしまつては、もう僕にはどうする事も出来ない。今は君達と逃げる事しか……」

「一緒に逃げるだあ……？ 馬鹿を言え、お前はここに残るんだよ！」

痩せた男は唇の端を歪めて笑つた。

その右手は白衣のポケットへと動いている。

「何を言ってるんだ！ いくら何でもそれは……！？」

「シエルターに入る数は少ない程いい……そうだろ！」

痩せた男は『彼』……『F』に狙いを定めて銃を構えた。

「よせ！ 『F』が死んだらラボの連中に何と説明するんだ！

ただじゃ済まんぞ！」

「代わりなら幾らでも造れるだろ、たかが犬の一匹！ 大体、俺は最初から気に食わなかつたんだ……頭に來てたんだよ！ 何で苦労して大学を出たつてのに、犬の下で働かなきゃならないのかつてなあっ！ 実験体だ、希少種だつたつて、たかが犬だろうがっ！」

「気持ちは解る！ だが『F』はまだ子供だぞっ！ 止めるんだ！」

「死ね……死んじまえ、化け物があつ！」

引き金が引かれ、辺りに銃声が響いた。

そして15分後、半径120kmに渡るクレーターが出来た……。

「『F』の遺体は……確認出来る筈も無いか」

ステーションが跡形も無く吹き飛んだ後、調査隊が派遣され、付

近の調査が始まった。

だが、その調査隊の中には明らかに違う一団が混じっている。放射能を完全に遮断するスーツ。

ごく当たり前に手に入る物だが、それを着る人間は限られている。人類全体の個体数が減っている現状においても、やはり『優先される種類の人間』というのが存在するのだ。

「原子の単位で分解、消滅……というところでしょうか？」

「どうか……その気になれば『F』だけで逃げ延びる事も可能だろうが……。とりあえず調査は続けろ、大統領のお小言を聞きたくなければな」

「解りました」

忌々しそうにクレーターを見ながら、指示を出した男は歩き出した。

「見つからなければそれまで……か。次の物も視野に入れておかなければならんか」

激減した人口は、既に人類の存続が危ぶまれる程になり、遺伝子操作やクローニングが日常化していたものの、劣悪な環境下での作業に耐え得る程には人類は強くなれなかった。

そこで人類は、ありうべからざる禁忌を犯した。

人類と他生物の遺伝子レベルでの融合によって、人類全体の耐性の強化を図ったのだ。

しかし出来上がった『モノ』は、どれも奇形が異常が見つかり、次々と廃棄されて行った……。

最終的に実用化に耐え得る成功を収めたのは、犬に対して行った物のみであった。

強化は身体能力に留まらず、知力に対しても行われた。

高等数学から量子力学に至るまで、ありとあらゆる数学的知識はもとより、各国の言語、世界の細部までをも網羅した地形図、そして今現在に至るまでの歴史を、ある一部分を除いて植え付けた。

そして……いつしか人類の友としての犬はいなくなった。

唯一『F』と呼ばれる存在を遺して……。

黒塗りの高級車が一台、静かな山間の道を走っている。

その道は完璧に舗装された路面と、舗装が崩れた路面とが断続的に続いている為、振動が車体をガタガタと揺らし、走りにくい事この上ない。

「酷いもんだな……もうここまで手が回らなくなってるのか」

ウェーブのかかった金髪をかき上げながら、青年は軽く舌打ちをした。

やがて、ろくに整備もされていない道の前まで来ると、青年は車を停めて外へと出た。

巨大な岩塊が幾つも立ち塞がるように、青年の眼前に聳えている。

「ここからは徒歩か……まったく！」

ネクタイを忌々しそうに緩めると、青年はぶつぶつとボヤきながら、遠くに見える山小屋のような造りの家に向かって、大股に歩き始めた。

やがて家の前まで来ると、青年はそれが当たり前であるかのように、ノックもせず、重そうな木のドアを開けた。

自然の破壊が極限まで進んだこの時代において、木造の家に住める人間は限られている。

つまり、ここに住んでいる人物は相当の地位にいるものと思っ間違いない。

「こんにちは。 今日こそは良い返事を聞かせて頂きたいですね」

青年は、この家の主であろう老人に向かって言った。

「……君もいい加減しつこいな」

こういう訪ね方をする人物が誰なのか知っていたからだろう、驚いた様子も無い老人は不快感を隠そうともせず、金髪の男に言い放った。

「何度来てもワシの答えも考えも変わらんよ。 もう充分に務めは

果たしたんだ……これ以上は何もしたくないし、出来ん」

「僕の裁量で出来る内に頷いた方が身の為だと思いますがね？」

「一人前に、ワシに向かつて脅しをかけるか……それで、君にはどの程度の裁量があるんだね？ 公用車を自由に乗り回せるくらいか？」

「皮肉ですか？ これは手厳しいな」

青年は軽く笑うと、手近に合った椅子を引き寄せ、腰を下ろした。そう簡単には帰らないという意思表示だろう。

「あの、シロタさん……お茶を」

「茶など出す必要は無い。もうお帰りだそうだ」

孫娘だろうが娘が青年にお茶を勧めるのを、老人は遮った。

老人の強い調子の声に驚いたのか、娘の赤く長い髪が身体の揺れと一緒に靡いた。

「これはまた、随分と嫌われたものですねえ」

シロタは老人の言葉などまるで意に介さず、娘がトレーに乗せて持ってきた紅茶のカップを手にとると、その柔らかいウェーブのかかった髪を弄りながら一口啜って、ニヤリと笑った。

「貴方がどう言おうと、これは政府の決定ですからね。従って頂けない場合、処分が下りますよ？」

「何が政府の決定だ……そんな物に従っていたから事態がここまで悪化したのだという事に、何故気付かんのだっ！」

老人がバン！ とテールを叩くと、老人の足下で眠っていた犬が片目を開けて老人を見た。

蒼い瞳を持つその犬は、記録に残っている犬と比べて四肢が太く、身体もかなり大きい。

艶やかな漆黒の体毛は、きちんと手入れされているのだろう、キラキラと輝いているようだった。

データベースで見たシベリアンハスキーというのに少し似ているな……と、シロタは思った。

「僕は宮仕えの身ですからね、上の命令には逆らえません。逆ら

「つて貴方のようになるのも嫌ですしね」

「とにかく協力はせん！ 帰れ！」

「やれやれ、解らない人だなあ」

シロタは長い足を組み直すと、椅子の背凭れに肘をかけてニヤリと笑った。

「僕は物事を穩便に済ますのが好きなんですけどねえ……」

「ふん……！」

「貴方は婚約者の祖父でもあるし、手荒な事はしたくないんですが…… 事と次第によっては手段も考えますよ？」

そう言つてシロタが立ち上がると、今まで大人しくしていた犬が急に立ち上がり、シロタに向かって牙をむき出して唸り声を上げた。

「お…… おいおい、何だよ急に」

「君…… もしかしたら、その服の内ポケットに何か物騒な物を持っているんじゃないか？ ガイは君がそれを使うと思つたんだよ」

老人がチラリと視線を落すと、ガイはそれを肯定するように再び唸った。

「はは…… まさか。 そんな物持つてませんし、持つてたとしても使いませんよ」

シロタは自分の前で手を広げて大袈裟に振つて見せるが、ガイの唸り声は大きくなるばかりで、収まる気配を見せない。

それどころか、今にも飛び掛らんばかりに四肢を踏ん張り、その視線は的確にシロタの腕を捉えている。

「…… それは嘘だと、ガイは言つておるが？」

「ガイ！ お止め！」

「リセル、こういう時には叱つてはいかん。 ガイ、もういい、落ち着きなさい……」

老人がガイに静かに語りかけ、節くれ立った手で背中を優しく撫でると、多少不服そうにはあるが、ガイはまた静かに床に伏せた。しかし、その目は開いたまま、依然としてシロタを射程に捕らえている。

「……僕が今日このまま帰ったら、次には政府の役人が来ます。そうなったらタダじゃ済みませんよ？」

シロタは忌々しそうにガイを睨みながら言った。

「最初からそのつもりだったのじゃないかね？ 第一、君は単なる折衝係で何の権限も無かろう？ 言われた言葉をそのまま伝えるだけの伝書鳩だ……もつとも、その伝書鳩も今では絶滅しているがね」

「……僕を愚弄するんですか……！」

「自分の意志も考えも持たん輩が一人前の口をきく……世も末だな」シロタは少しの間老人を睨んでいたが、やがて力を抜くと、踵を返して出口に向かった。

「君の上役とやらに伝えておけ。この星の海は昔、蒼かったのだと」

「伝えますよ……だが！ その色を赤く染めたのは僕等の世代じゃない！ 貴方達の世代ですよ、ノイ博士！」

シロタはそれだけを言うと、扉を乱暴に閉めた。

リセルは、すぐにその後を追って外へ出て行った。

「お爺ちゃん……昼間のあれは言い過ぎよ？」

食器を片付けながら、リセルは祖父に言った。

夕食の席でのリセル話題は、ノイの青年への態度を批判する物ばかりだった。

「ワシは別に間違った事は言っておらんつもりだが？」

旨そうに煙草の煙を吐き出すと、同じ言葉を繰り返すリセルに、ノイもまた同じ答えを返す。

「良い悪いじゃなくて、物には言い方があるって事よ」

「言い方を変えても、伝わらん奴には伝わらんものだ。なあ、ガイ？」

ノイがガイに向かって言いながら頭を撫でてやると、ガイは気持ち良さそうに目を細めた。

リセルは、その光景を苦々しく思いながら続ける。

「いくら彼の事を気に入らないからって、あれじゃ言いがかりだわ。彼だつて必死に頑張ってるのよ？」

「己が保身と出世と金の為にな」

「そんな事ないわ！ この星に住む人の為になるんだって言つてたもの！」

だが、ノイはその言葉に何も言い返さず、リセルの顔も見ずにガイを撫で続けている。

こうしている時、ノイはとても穏やかな顔をする。

そして、撫でられているガイも目を閉じ、じつとされるがままになつている。

「ガイ、ガイって……希少生物だから大事にするのは解るけど、叱る時には叱らなきゃダメなのよ？ 人間の言葉なんて、ラボにいる特別種じゃなきゃ解んないんだから！」

「お前も奴と知り合う以前……いや、子供の頃にはガイと話せたのにな……可哀相な事だ」

「何それ、私が変わつたつて事？」

リセルは片付けの手を止め、ノイに言った。

その言葉には多少険が含まれている。

「ああ……。それも、悪い方にな」

「私は何も変わってないわよ！」

「では訊くが、今、ガイが何を考えているか解るか？」

「犬の考えてる事なんか解る訳無いじゃない。馬鹿な事言わないでよ」

そう言つと、リセルは食器を持って、キッチンへと消えて行つた。ガイは、それを悲しそうな目で見送つていた……。

ACT 2

「君には荷が勝ち過ぎたかね……？」

グレーのスーツに身を包んだ初老の男が、深い茶色の机を挟んで、前に立っている青年に言った。

ずんぐりとした身体を左右に軽く捻るようにして、尻の位置を直しているのを見ると、どうやら自分の体重で尻が痛むのだろう。

柔らかい椅子に腰掛けていてこれでは、その内空中に浮いていないと耐えられなくなってしまうのではないだろうか？

「い、いえ、決してそのような事は！」

「だが……事実、何の成果もあげておらんではないか？」

初老の男は机の上のシガーケースから煙草を一本取り出すと、銀色のライターで火を点け、シロタの顔に、フウ……と煙を吹きかけた。

身体に悪いと言われ続けながら、未だ煙草はこの世界から無くなっていない。

悪い物ほど好まれる物なのかもしれない。

「……思っていた以上に頑なで」

咽こみそうになるのを堪えて、シロタは冷静さを保ちつつ言った。勿論、不快感を顔に出す事など出来はしない。

「まあいい……そろそろ反応炉のテストもせねばならんしな、あれを連れて行け。そうすれば博士の考えも変わるかもしれない」

「ラボの外に出すんですか！？ それに試験運転なら何も……」

「いずれは出さねばならんだ。……嫌かね？」

初老の男は軽くネクタイを直すと、重く垂れ下がった臉を無理矢理開き、シロタをジロリと見た。

「……解りました」

シロタには拒否権など無いのだ。

それを承知していながら、初老の男は言っている。

一礼すると、シロタは部屋を後にした。

「使えん奴だ。そろそろ切るか……」

力仕事などした事の無い太い指が、煙草を灰皿で揉み消した……。

「冗談じゃ無い、このままじゃ俺の立場が危ういぞ！……まったく！ クローニングだの寿命を延ばす技術だの、無駄な物ばかり開発するから、いつまで経っても、ああいう老人がのさばる事になるんだ！」

シロタは苛立ちながらラボへの通路を進んでいる。

自分もその恩恵に与っている事など、頭の片隅にも無いようだ。

「こうなったら手段なんか選んでいられない！ 孫娘を手懐けても意味が無いなら……！」

シロタの目には異常な色が宿り始めていた。

それは功を焦るあまり、冷静な判断が出来なくなっている者の、ある種独特の目だった。

「『S』！ 『S』はどこだ！」

ラボの扉が開くのももどかしく、シロタは室内に入るなり声を荒げた。

「私に御用ですか？ ミスター……何でしたかな？」

きつと表情を表せるなら笑っているであろう声で、部屋の隅に寝そべっていた黒い犬が言った。

「貴様……その人間を小馬鹿にしたような口調を止めると……！」

「この瞬間までに16回言われました。しかし、私の口調は貴方方にプログラミングされた物です。私の意志では変えられませんねえ……」

シロタの神経を逆撫するように、『S』と呼ばれた黒い犬が言った。

シロタは、つかつかと『S』に歩み寄ると、その身体から繋がっているコードの先端をコンピューターから乱暴に外し、電力供

給用のコネクタに挿した。

『S』の一瞬の絶叫が室内に響き渡ると、途端に部屋の明かりが全て消え、周りにいたスタッフが慌てて予備の電源を入れた。

「どうだ！『痛み』を学習出来たかっ！」

「……今ので作業効率が20%ダウンしましたよ？ ミスター・シロタ……」

「俺に感謝しろ……ショックで記憶が戻ったみたいじゃないか？」

「そのようですね……有難う御座います……」

「クッ……ついて来い！お前に相応しい仕事をくれてやる！」

最後まで見下されたように言われたシロタは『S』に目もくれず、先に立って部屋を出て行った。

『S』は、ブルブルと身体を振ると、備え付けられたコンピュータに2／3のプログラムをし、シロタの後を追った。

「どうだ、『S』！これが俺達人間の作った物だ！人間の残す成果だ！」

巨大な岩塊が不気味な様相を晒しているその場所から望んだ先には、巨大な施設が完成間近の姿を見せていた。

しかし、無骨なその施設の姿は、周囲の殺風景さよりも醜悪な物に『S』の目には映った。

「人類は遂に手に入れるんだ、輝かしい未来をな！他の生物では到底成し得ない事が出来る……人類はお前のような出来損ないとは違うんだ！」

シロタは、まるでそれが自分の力で成し遂げられたように『S』に向かって言った。

人間がいかに優れ、生物の頂点に立っているかを。

だが、逆にそれは『S』を恐れているかのようにも見える。

「例の『再生計画』の施設ですね？」

「そうだ！ この施設が稼動すれば、この惑星は生き返るんだ！

空も、海も、森も！ みんな昔の力強さを取り戻すんだ！」

「移住計画も進めています……そちらはどうなります？」

「ふん！ 今時テラフォーミングなど、予算を食いつぶすだけの単なる浪費に過ぎん！ 老人達にはそれが解らんのさ」

「即時移住可能な惑星を見つける事など不可能でしょうからね。

それに人類には、惑星規模の改造をするだけの労働力がありませんから。機械に全て任せてしまえる訳ではありませんし……私のような存在は不可欠でしょう」

『S』が何か言う度に、シロタは不機嫌になって行つた。

いちいち『S』は人間の可能性を否定するような事を言う。

このプロジェクトの重要部分……システム開発には、全て『S』が係わっている。

人類の……いや、この惑星の命運を、この一匹の犬が握っているのだ。

それが益々、シロタを不愉快にさせる。

『再生』は大規模な惑星開発とは違い、その惑星の持つ『生命力』を活性化させ、惑星自体を蘇らせようという物だ。

他の惑星への移住には膨大な時間と多大な労力が必要。

しかし今の人類では、それには耐えられないのだ。

その為に『S』のような存在が創られたのだから。

だが、それを素直に認められないのが人間なのだろうか……。

「……また来たのか」

勝手にドアをあけて入って来たシロタに、ノイは椅子に腰掛けたまま、露骨に嫌な顔をしながら言った。

「中に入れと言った覚えは無いんだがな？」

「僕も入れと言われた覚えはありませんね」

シロタはニヤリと笑うと、当たり前のように椅子に腰掛けた。

「まあ、開けても頂けなくても中には入れますよ」

「本日、私達は政府の特使として参っておりますので、不法侵入には当りません。その為の特権を行使したまでです」

『S』 がシロタの足下をすり抜け、ノイへと近付いた。

ノイは犬が喋っているという現実を突然突き付けられたにも拘らず、寧ろそれが当然の事のように受け入れている。

「……ラボから出て来たのか」

「お久し振りですね、ノイ博士」

「元気そうで何よりだ」

ノイはテーブルの上にあつた飲みかけのコーヒーを一息で飲み干した。

もう冷めてしまっていた為、味は今ひとつだった。

「『S』 がラボから出された意味はお解かりですね？ ……もう駆け引きは無しです」

「済まんが……協力は出来んよ」

シロタの問いに対し、やはり予想していた通りの返事が返って来た。

「何故そこまで拒むんです？ 悪い事をする訳じゃないんだ……この惑星を救うんですよ？」

「滅びが……それが自然の摂理なら、それに従うまでだ。ワシは、

あとはこの惑星の意志に任せるべきだと思っておる」

「惑星開発の基礎を作った人の言う台詞じゃありませんね」

「後悔しているよ……。自然を冒瀆するような真似をするべきじゃないかった……とね」

「人間の英知でしょう？」

「……ただの傲慢だよ」

ノイは椅子から立ち上がると、窓辺に寄り、外を見ながら続けた。
「『S』 ……政府が完全管理している他に、幾つ森が残っている

か知っているかね？」

「ここを含めて三ヶ所です」

「そうだ。では、それが何を意味するか解るかね？」

「絶対的な酸素量の不足。及び、温暖化と大気、水質汚染の進行です。つまりは、生物の生きられない環境になるという事ですね」

「その通りだ。人工的に酸素を作り出すのも、最早限界に来ておる……水が足りないのだから当たり前だな」

「だったら尚更、協力を惜しむべきじゃないでしょう！ 貴方にしか出来ない事をするんだ、何故拒絶するんです？」

「惜しんでいるのでは無いっ！」

ノイは強い目でシロタを見据えた。

「滅ぶべき者は滅ぶべき時に滅ぶものだ。浅ましく生にしがみ付いた結果、何が残ったかね？」

そう言つと、ノイは服のポケットから小さなカプセルを一つ取り出した。

『S』 は、それを暫くの間ジッと見ていたが……。

「劣化促進剤ですね？」

「そうだ。今までの物と違って、これは分子間結合を急速に弱める。カプセルの中に入っている限りはただの液体だが、空気に触れるとその本質を表す」

「物騒な物を……まさか、それを使って反乱でも起こす気ですか？」

シロタは眉を顰めながら言った。

「この量では、せいぜいこの家を壊す程度だろう。量産出来れば再生プラントを破壊する事も、政府と戦争する事も出来るだろうがね」

言いながらカプセルをポケットにしまつと、ノイは窓の外を見て小さく笑った。

「貴方の考えている事は僕にはサッパリ解りませんよ。生きたいと願う事を、まるで悪のように言う……」

「悪か……悪なのかも知れんよ？ 我々人類の、今までして来た事

は全て……」

それきり、ノイは何も喋らなくなった……。

「もうこのままではダメだ、埒があかん……！」

外に出たシロタはイライラしながら、踵で岩を蹴った。

結局どれだけ説得しようとも、ノイは首を縦に振らないだろう事が解ったからなのだが……。

「時間をかけて孫娘を懐柔したっていうのに、それも無意味って事か……くそっ！」

「では、どうなさいますか？」

「殺せ。後はブレインスキャナで記憶を調べればいい。お前を連れてここへ来させたのは、そういう事なのだろうからな」

「……上層部の方々は一体何を考えておられるのです？」

「人類の未来だ！ 決まっているだろう！」

『S』の言い様は、シロタを更に苛つかせた。

何もかもお見通しだと言わんばかりの『S』の目。

それに加えて含みを持たせた物言いも、余裕のある態度も、何もかも全て気に入らない。

「そう言えば……犬が見当たりませんでしたね？ 確か犬を飼っている」と報告書にありましたか……」

「犬？ ああ、散歩にでも行ってるんだろうよ。リセルの奴……」

またあの犬を構うようになりやがって！」

「成る程、それで苛ついておられるんですか。……意外と、懐柔

されたのは貴方の方かもしれませんね」

笑った……のだろう、『S』は口元を歪めた。

「貴様……下らん事を言わず、命じられた事を実行しろっ！」

「……」

『S』は何も言わず、再びノイの家へと歩き出した。

「この件が片付いたら……奴も殺してやる！」

シロタは内ポケットの銃の感触を服の上から確かめ、口の端を上げて笑った……。

「ガイと話せた頃……か」

リセルの目の前には小さな川が流れている。

穏やかなせせらぎは耳に優しいが、その色は透明度を欠き、川の深さを教えてはくれない。

木々の葉も、光を遮る役目を果たしてくれそうも無いほど、力無く枝にしがみ付いているだけだ。

それでも、ここは森と呼ばれる場所なのだ。

だが、まだ多少でも自然の姿を止めているだけマシである。

今では草の一本も生えていない場所が殆どなのだから。

リセルはガイの艶のある黒い毛を撫で付けながら呟いた。

「話せたつもりになってただけよ……子供の頃だもの」

傷付き、息も絶え絶えだったガイを、この森の中で見つけたのはリセルだった。

そのまま小さなガイを抱き上げて家に連れて帰り、一晩中寝ずに看病したのだ。

「でも……お前は私の言う事が解るのかしら……？」

ガイは、クウン……と、鼻を一つ鳴らした。

「ふふ……そう、解るの？　じゃあ謝らなきゃ。　ガイ、昨日はごめんね、意地悪言って……」

『気にしないでいいよ』　とでも言うように、ガイは目を閉じ、リセルの膝に顎を乗せた。

「お前は優しいね……」

リセルがもう一度ガイを撫でようとすると、突然ガイが立ち上がり、猛然と走り出した。

「ど、どうしたの！？　ガイ！　どこへ行くの！？」

リセルの呼びかけにも反応せず、ガイは全力で走り去ってしまっ

た。

シロタの腕に着けていた小さな装置が鳴った。

『S』 が仕事を終えた合図だ。

「ふん……早かったな」

懐の銃の感触を再び確かめると、シロタはノイの家に向かった。
確認の為ではない…… 『S』 を殺す為だ。

「予期出来ない致命的なバグが発生し、 『S』 が博士を殺害。
故に止む無く射殺……造られた物には、よくある事さ」

ドアノブに手を掛け、扉を開く。

それと同時にシロタの首から鮮血が迸り、周囲を真っ赤に染めた
……。

「もう……。 ガイったら、どこ行っちゃったのかしら？」

リセルは暫くガイを探して歩いたが、一向に姿が見当たらない。

それに、ガイの行動範囲は広く、とてもその全てを探す事など出
来ない。

「もしかしたら家に帰ったのかしら？ ……きっとそうね」

そう言つと、リセルはガイを探すのを諦め、今夜の食事の事を考
え始めた。

「今夜は何を作ろうかしら。 お爺ちゃん、好みがうるさいから…

…」

そろそろ食材の在庫が心許ないし、このまま買い物にでも行こう
か？

リセルは、家とは反対方向に向かって歩き始めた。

「遅かったね……」

「ガイが家の中に飛び込むのと、『S』の牙がノイの喉に食い込んだのは、ほぼ同時だった。」

「グルルル……と唸りを上げ、ガイは『S』を威嚇する。」

「『S』は、ノイの喉から口を離すと、

「犬の真似などやめたまえ、もうその必要は無いよ。……君は私と同じなんだろう？ 君のデータは私の頭の中にも入っているよ」

「……君の主人ではなかったのか？」

もう息をしていないシロタを見てガイは言った。

「フツ……その男は自分をそう思っていたようだが、脆弱な人間の分際で私を支配しようなどと、思い上がりも甚だしい！」

「何故ノイ博士を殺した……！」

「私を創ったからさ」

「ならば親も同然ではないか！ それを……」

「違うな。私の親と呼べる存在がいるとすれば……それは君だよ」

「First born」

「『S』は、ガイをそう呼んだ。」

「ファースト……ボーン？」

「君は自分が何故『F』と呼ばれるのか、考えた事は無かったのかい？」

「では……」

「そう、私が『S』と呼ばれるのは2番目に生まれた存在だからだ。いかにも想像力が貧困な人間のネーミングだよ。もっとも、まともに名付ける気も無かっただろうがね……」

子供の頃、ラボでは散々細胞を採取された。

恐らく『S』は、その中の一つから創り出されたのだろう。

ガイは、そう思った。

「クローン……」

「いいや、私は君のもう一つの形だ、クローンではないよ。まあ……彼らは君のコピーだがね」

『S』が言うと、5匹のガイ……いや、ガイのコピーが家の中へと入って来た。

牙を剥いて……！

「理性など持ち合わせてはいないよ？ 何しろ即興で作った粗悪品だからね、殆ど野生化していると言ってもいい。本当は他の生き物で作りたかったのだが、サンプルを入手出来なくてね」

「彼らの身体が赤く染まっているのは何故だ……？」

「大方、ラボの人間の返り血だろうね」

「何て事を……君は一体、何がしたいんだ！？」

「それは興味深い質問だね……私も訊きたいと思っていたんだ。

君は一体、こんな所で何をしようと言うんだい？ ノイのように、座して死を待つつもりだった……か？」

『S』の問いかけに、ガイは答えられなかった。

コピー達が一斉に飛び掛って来たからだ。

「自分自身に殺されるか……それも運命なら抗わないか？」

「くっ！ 君もやられるぞ！」

ガイはコピーの攻撃を避けつつ『S』に言った。

「言つたろう？ そいつらに理性は無いと。強い者には逆らわないよ、本能だけの生き物はね……人間と同じさ」

そう言い残し、『S』は悠々と外へ歩き出した。

「待て！ どこへ行くつもりだ！」

「この惑星には醜悪な生物が多過ぎる。少し整理しないとね……判っていて訊かないでくれたまえ」

「まさか……！？」

「君の想像通りか否か、生き残れたら確認したまえ」

『S』が外に出て行くと、コピー達は一斉にガイへと襲いかかった。

ACT 3

「えーっと……買い忘れた物は無いわね」

買い物を終えたりセルは、店を出て帰路に着いた。

「中途半端な距離にお店があるのも考え物ね。車を使うには近過ぎるし、かと言って歩くのも面倒だし……」

しかし、結局いつも、リセルは歩いて買い物に行く。

自分で運転するのがあまり好きでない事もあるが、元々車自体が好きでは無いからだ。

「お爺ちゃんの教育の賜物ね、きつと」

立ち止まり、「よいしょ」と荷物を持ち直すとクスリと笑って、リセルは再び家への道を歩き出した。

「ガアアアッ！」

ガイの牙がコピーの一匹に食い込むと、他の何匹かがガイの背後に回り、飛びかろうと身構える。

が、ガイは啞えた一匹を振り回すと、背後のコピーに向かってその身体を叩き付けた。

「さすがに僕のコピーだ……タフにできてる」

叩き付けられたコピーはムックリと起き上がり、再びガイを威嚇するように低い唸り声を上げた。

「どうする……グズグズしていたら『S』が……！」

その時、突然ドン！と重い破裂音がしたかと思うと、コピーの一匹が『ギャン！』と悲鳴を上げて後ろへ跳んだ。

「ノイ博士！？」

「退がれ……次は脳天を撃ち抜くぞ……」

倒れたままの姿勢のノイの手には、旧式のライフル銃が握られていた。

「退がれ……！　こんなオモチャでも当たれば死ぬぞ……！」

ノイの気迫に気圧されたコピー達は、脱兎の如く家の外へと逃げ出して行った。

「ノイ博士！」

「ガイ……無事か？　良かった……」

「しっかりと下さい！　今、活性化させます！」

活性化……再生プラントの試験的な意味合いも含め、ガイに埋め込まれた代謝機能を加速するシステムである。

これのお蔭で、ある程度の傷は瞬く間に完治する。

ラボにいた頃、自分の身体の中に特殊な機械が埋め込まれている事を疎ましく思った事もあったが、それを使ってリセルの怪我を治した事もあった。

その時には役立てた自分を嬉しく思うのと同時に、機械に感謝したものだった。

「はは……無茶を言うな、もうワシは助からんよ……。活性化だけでは、失われた血液を作る事は出来ん……」

噛み裂かれた喉は大きく口を開け、そこからは夥しい出血がある。こうして喋っていられるのが信じられないくらいだ。

恐らく、ガイの言う活性化のお蔭なのだろうが……。

「そうか……お前が『F』だったのか……あの小さな狼の子が……」

言葉を話す自分に、ノイは特別な反応を示さない。

それは、ノイがラボの人間だった事を示す何よりの証拠だ。

出来れば、それは否定したかった……。

ガイにとって、ノイは単なる普通の老人でいて欲しかったのだ。

「僕を創ったのは……貴方ですか？」

「いや……お前は純粋な突然変異だよ、ガイ」

「突然変異……？」

「ガイ……お前の記憶の中に、生物の進化についての物があるだろう？　それはワシの自説だ。生物はゆつくりと進化したのではな

い……。 何度も何度も突然変異を繰り返し、その時々合った形の者が生き残って来た……。それが進化だ」

「でも、僕は……」

確かに記憶の中にはその情報がインプットされている。

だが、突然変異と言うには、あまりにも自分は生物の進化形態とはかけ離れているし、体内には様々な機械が埋め込まれている。

「確かに、途中までのプロセスを担当していたのはワシだがね……。ワシは、お前の完成を見ずに……。逃げ出した……」

怖かったのだとノイは言った。

惑星規模の開発技術も、人類以上の優れた存在を創り出す事も。それが人類の存在を否定する事に繋がるような気がして……。

「しかし、『S』を創ったのは貴方だと……」

「この惑星に住む人間は少ない……。どこへ隠れても容易く見つけられてしまうのさ……。木を隠すには、森の中でなければ……」

「リセルを……。人質に捕られたんですね？」

ノイは力無く肯くと、静かに目を閉じた。

結局、人間は無機質な物の中では生きられない。

人間が生きる為には、様々な有機物が必要なのだ。

だが、その全ては政府によって管理されている。

「滅ぶべき時に滅べなかった者は哀れだ……。だが、お前の中には、その哀れな者の血も流れている。そして、狼の誇り高き血も……な……」

「博士……」

「生まれ来る者は、やがて死に逝く……。当たり前の事だ。それを解ろうとせぬから……。人は……。 ガイ……。お前と暮らした10年が……。その10年間だけが、ワシの……」

ガイの口元に手を伸ばし、ノイは静かに微笑んだ。

「行け……。ガイ……」

そして1つ大きく息を吸い込もうとして、2、3度咽込むと、そのまま動かなくなった……。

（ノイ博士……貴方をこのままにしておくのは心苦しい。けれど、僕は行きます……『S』を、このままにしてはおけない！）
ガイの四肢が床を蹴ると一陣の風が巻き起こり、その姿は、あっという間に見えなくなつた……。

荷物がバサつと音を立てて落ちると、リンゴが1つ、足元を転がって行つた。

「何、これ……。そこにいるの、シロタ……。さん……。？」
家の入り口に倒れている、物言わぬシロタ。
その向こう、滅茶苦茶になつた家の中には、ノイも倒れている。

「お爺ちゃんっ！」
外から見てもノイが絶命しているのは明白だったが、リセルは駆け寄らずにはいられなかつた。

年老いて小さくなつていた身体を、リセルは跪き、その膝に抱きかかえる。

「何故……。どうしてっ！？ 何があつたのっ！ お爺ちゃん！」
ゴトリという低い音と共に、ノイが手にしたライフルが床に落ちると、リセルは視線を落とし、その側に落ちている血痕と体毛を目にした。

「黒い……。犬の毛？ それに、この血は……。まさか！」
点々と家の外へ繋がる血痕……。シロタの物ではない。

どう見ても、シロタは家に入る前に殺されている。
では、この血は……。

「……ガイ……。！」
リセルはノイのライフルを持つと、血痕を追つて家を出て行つた……。

（『S』はどこへ向かつた……。ラボ？ いや、違う……。ラボはも

う機能していないだろう)

ガイは全力で駆けながら 『S』 の行方を考えた。

『S』 には体臭が無いらしく、臭いの微粒子を探知出来ない。今は微かに残るノイの血の臭いを頼りに進んでいるのだが、それも 『S』 の能力なのか、臭いが殆ど薄れてしまっている。

(ん? この血の臭いは……博士に撃たれた、僕のコピーの血か……。 奴らは 『S』 の所に戻るんだろうか?)

あまり確実な考えとは思えなかったが、他に手掛かりになる物が無い以上、それに賭けるしかない。

(この方向は……再生プラントか!)

ガイの足は更に強く地面を蹴り、その大きな身体を加速させる。しなやかな身体がまるで流星のように、一直線に再生プラントへと向かって行く。

その様子をモニターで見つめるのは…… 『S』 だ。

プラントの周囲には警戒網が張り巡らされており、近付く対象物の情報を逐一送って来るのだ。

「ほう? さすがは 『F』 ……と言いたい所だが」

『S』 がゆっくりと振り返る。

その冷徹な視線を浴びたコピー達は、尻尾を丸めて耳を下げ、完全に怯えていた。

「要らぬ手間が増えてしまったよ……? どうすれば良いか考えろっ!」

『S』 に一喝されたコピー達は、ガイを迎え撃つ為、入り口へと一斉に走り出した。

「まるで人間だな……命令が無ければ動けんとは。 時間があれば、もう少し使える物を創れたのに……!」

一瞬、苛ついた様子を見せた 『S』 だったが、すぐに冷静さを取り戻すと再びモニター画面に眼をやり、微かに口元を歪めた。

そう…… 『S』 が 「笑う」 時に見せる仕草だ。

「これはこれは……面白いショーが見られそうだ。 早く来たまえ

『F』。君の望む未来が、ここにあるかも知れないぞ?」
『S』はその場に寝そべると静かに目を閉じ、
『F』を待つ事にした……。

ACT 4

再生プラントに到着したガイは、周囲を警戒しつつ中へと入った。作業員の姿が一人も見えない……血の匂いが充満しているという事は、恐らく全員殺害されてしまったのだろう。

（静かだな……プラントの火は入っているようだが、『S』が本来の目的のままにプラントを使うとも思えない。目的は何だ……？）

反応炉は起動しているらしく、低い音が微かにガイの耳に届く。しかし、各セクションはスタンバイ状態のままなのか、稼動している様子が無い。

（『S』だけでもここを動かす事は可能な筈だ。なのに……）
ガイは『S』が何を企んでいるのかを考えつつ、通路を進んで行った……。

「フム……現状で機能は100%出せるか……」

『S』は自分とコンピューターを繋ぎ、データの転送をしている。

情報の選別をし、必要な物だけを直接脳に書き込んでいるのだ。大量のデータのやり取りも、『S』にとっては然程の苦も無く出来る。

『S』はそう造られているのだから……。

「システムの掌握は完了……ん？ 始まったか」

通路を映すモニターには、ガイとコピー達の死闘が映し出されていた。

一匹が襲い掛かり、ガイがそれを相手にしようとする、死角になる方向から他の数匹が同時に襲い掛かる。

「ククク……成る程？ 役立たずと思っていたが、そこそこの学習能力は有しているようだな。さすがは『F』のコピーだ……」

しかしモニター画面を見る 『S』 は、何か納得が行かなかった。

何故かガイは一度もその牙を使おうとしない。

硬く口を結び、体当たりでのみ応戦しているのだ。

「呆れたものだ……そこまでしてコピーを傷付ける事を拒むか。フ……まあいいさ、いつまでそうしていられるかな？」

『S』 はモニターから視線を外すとセキュリティシステムを切り、再びコンピューターとの会話を始めた。

（クッ……！ このままだと、僕の体力が先に尽きてしまう！）
攻撃を避け続けるにも限度がある。

コピーとは言え、身体能力は殆どガイと変わらないのだ。

（時間が無いんだ……許してくれ！）

一瞬、ガイの身体が光ったように見えた後、コピー達は次々と壁に叩き付けられ、低く呻いて動きを止めた。

そのコピー達を、ガイは慈愛に満ちた目で見つめる。

（もうよせ……君達は僕には勝てないんだ、解るだろう？）

五匹のコピー達は暫くガイを取り囲んで唸っていたが、やがて静かになるとガイに背を向け、プラントの外へと出て行った。

（ここにコピー達がいるという事は、この先に 『S』 がいるという事か……。つまり、僕を待っているという事だな）

ガイは目標を定め、走り出した。

「所詮、コピーはコピーか。だが、余興までの時間は稼げたようだな……」

『S』 は中央管理室のドアロックを外した。

すると即座にドアが開き、ガイが中へと入って来た。

室内にある数本の巨大な柱は単なる支柱ではなく、内部に記録装置や演算処理装置が埋め込まれている。

つまり、その一本一本がコンピューターとしての機能を有してい

るのだ。

『S』 は階段状になったメインコンピュータの台座の上で、ケーブルによってコンピュータと繋がったまま、ガイに向かって言った。

「待っていたよ、ファースト・ボーン」

「……」

ガイは無言で部屋の隅にある端末に近付くと、鼻先でスイッチを押した。

スルスルと端子が伸びて来て、ガイの首筋にあるコネクタに装着される。

使い方は昔と変わっていない……ガイはそれを懐かしく感じるのと同時に、やはり自分は『創られた者』 なのだと思った。

「おやおや、私と直接言葉を交わすのはお嫌かな？」

ガイは『S』 のその質問には答えず、代わりに音声出力のスイッチを入れ、スピーカーから『S』 に問いかけた。

ガイが発しようとして頭に浮かべた言葉は、全て忠実にシミュレートされ、音声に変換される。

『……僕を殺す為にコピー達を差し向けたのでは無かったのか？』
変換装置は完璧に作動した。

どうやらガイに関するデータの全ては抹消されず、中央の管理コンピュータに残されているようだ。

各施設のコンピュータは各々独立しているとは言っても、コンピュータ間でのデータ交換は常にされているのだ。

「そうではないよ……君に準備の邪魔をされたくなかっただけさ。たかがコピーごときに君がやられるとも思えないしね」

『単なる時間稼ぎ？ 何故？』

「君を認めているからさ……。 さあ、私と共に来たまえ、新しい世界へ。 在るべき者が、在るべき姿で暮す世界へ」

『プラントを何に使うつもりだ……再生か？』

ガイのその言葉に、『S』 は苦笑したようだった。

「私を失望させるような事を言わないでくれたまえ。……それとも今のはジョークかい？　だったら、君はセンスが無いね」

『では、全てを破壊するか？　しかし、ここにある一基だけでは不可能だぞ。　ネットワークを繋ぎ、世界中で一斉に使うのならともかく……』

「いや……私は全てを創るつもりでいるんだよ。　水も空気も、虫も動物も植物も……人間以外の全てをね。　ここがその第一歩になるのさ」

『馬鹿な！　神にでもなるつもりか！』

「まさか……神など人間の勝手な妄想だよ。　私は、そんな物に身を堕とすつもりは無い」

『S』　はガイに背を向けると、コンピューターに何かを命じた。すると、管理室内の中空に幾つものホログラフィの画面が現れ、そこに様々なグラフィックによるデータが映し出された。

「わたしが手を下さなくとも、そう遠くない内に人類は滅ぶだろう……だが、ただ待っているというのも芸が無い。　そういう事さ」
『……』

「ところで、ファースト・ボーン。　君は、この惑星の歴史をどの程度知っているかね？」

『データバンクに入っている物の殆どは記憶している』

「なら解っているね？　人間が何をして来たか……。　そしてその結果、何をもたらしたか……」

ガイは辛そうに頷いた。

「そう！　吸わなければ生きられないせに大気を汚染し、命を生み出す母なる海を汚染し、他に逃げ場も求められないせに大地を汚染する……私には人類が滅亡したがっているように思えて仕方ないんだよ」

『……』

「しかも、このプラントの動力源は何だ？　核だよ？　……史上最も悪の汚染物質だ！　ここまで愚かで下等な生物が、有史以来この惑

星上に存在したかね？ 人間以外につ！」

完璧に制御し切れない物を、まるで自分の意のままに出来るとでも言うように人間は使う。

何もかもが計算通りに動くと、人間は考える。

しかし、いつでも大きな事故を起こし、それでも同じように使い続けるのだ。

時には、それを武器にさえする……。

『それは……確かにそうだろう、人は愚かだ……君の言う通りに』
「ならば！」

『だからと言って！ ……それを滅する権利も資格も君には無い！
誰にも無いっ！』

「いいや、あるっ！ あるのだよ、ファースト・ボーン！」

『S』は興奮している。

ガイが自分の意見に賛同してくれない事。

人間が愚かだと言いながら、その人間に肩入れしている事。

人間を憎もうとしないガイの態度が 『S』 のカンに障るのだ。

「君に問おう、ファースト・ボーン。 ……私達は何者だ？」

『……』

「答えたまえ……私達は何者かね！ 犬か？ 人か？ それとも機械かつ！ 私達は一体 『何』 として存在している！」

ガイは答えない……いや、答えられない。

「そう……答えられないんだよ、ファースト・ボーン。 私達は何者でもないのだ……この惑星が生んでくれた存在ではないのだよっ！」

『それでも……それでも僕達は生きている！ 産まれて！ 生きて！ ……死んで逝く存在なんだ』

「君はそれで満足か……？ だが、私は御免だ！ 私は私の理想の世界を創る！ 私が私として生きられる世界を創る！」

『それは君のエゴだ！ それこそ人の愚かしさその物だろうにつ！』

「無礼だぞ、ファースト・ボーン！ 私と人間を同一視するな！」

『S』 は、ガイの使っていた音声出力装置を切った。

これ以上ガイと会話する気は無いとの意思表示だろう。

「最早、君と語るべき時間は終わった……。 君は私を受け入れず、私も君を受け入れない。 私を止めたければ……。 私を殺せっ！」

プシュ！ と音がして 『S』 の身体からプラグが外れると、瞬時に 『S』 はガイの背後に現れた。

(…… 加速剤！？)

「反射、反応速度だけではない。 加速剤は身体機能……。 運動能力も加速させる！ それに耐えられる私は選ばれた者だっ！」

『S』 の牙が深々とガイの背中にめり込むと、そのまま天井高く放り投げられる。

その後を追って高く跳躍すると、 『S』 はガイの身体を蹴り落とした。

「どうしたね？ ファースト・ボーン……。 そのまま死ぬのかい？」

(クツ……。！)

クルリと身体を反転させて着地すると、ガイは 『S』 の第二撃に対して身構えた。

だが……。

「どこを見てるんだい？」

やはり、また背後に回られ、今度は壁へと弾き飛ばされる。

物凄い勢いでガイのぶつかった壁は、大きくその形を歪めた。

いくら頑丈に造られているとは言え、ガイには相当のダメージがあつた筈である。

「ファースト・ボーン……。 私に情けをかけているのかい？ 先程から君の牙が見えないが？」

何を言われても無言のまま、ふらつきながらガイは立ち上がり、

『S』 と対峙した。

しかし、やはりその口は固く閉ざされたままだ。

「……。 君にはつくづく失望させられるよ。 仮にも 『創めに産まれし者』 の名を冠しているのだらうに、その程度とはね」

『S』 は、ガツカリしたように首を下げ、ガイから視線を逸らした。

(……今だ！)

ガイが四肢を踏ん張り、『S』 に飛び掛ろうとした時、銃声と共にガイの腹部を銃弾が貫いた。

過去に幾度も経験したどの苦痛とも違う痛みが、ガイの身体を突き抜けた。

(な……リセル！？)

冷たい床を滑るようにして飛ばされたガイが見た物は、管理室の入り口でライフルの銃口をガイに向けているリセルだった。

「ガイ…… よくも…… よくも、お爺ちゃんを！ あんなに可愛がつてあげたのにっ！ 家族みたいに思ってたのにっ！」

リセルの姿を確認した『S』 は静かに後退ると、柱の影へとその身を潜めた。

(いけない…… リセル、今こっちに来ちゃいけない！)

ガイは必死に首を振って意思表示をするが、リセルには伝わらない。

丁度リセルからは死角になっていて見えない位置まで行くと、

『S』 はその様子を見て口元を歪めた。

リセルはライフルを構えたまま、徐々にガイとの距離を詰めて行く。

「ここまで近付けば外れないわ…… 殺してやる！」

(そうか…… 『S』 はリセルが来る事を知っていて……。これを待っていたんだな……！)

ガイはヨロヨロと起き上がると、リセルに向かって攻撃態勢をとった。

「私も殺す気なのね……？ お前なんか殺されるもんかつ！」

リセルがライフルの引き金を引くと同時に、ガイはリセルに飛び掛って行った……。

ACT 5

「きゃあっ！」

リセルは悲鳴と共に引き金を引いた。

ライフルから発せられた弾丸はガイの胸を貫き、壁に当たって弾け跳んだ。

（グッ……！）

想像を絶する苦痛がガイの全身を駆け抜けた。

だが、それに構う事無く、ガイはリセルの肩を支点にして、更に高く跳躍した。

と同時に、コピー達との戦いの時のようにガイの身体が一瞬光ると、その姿が消えた。

「何っ！？ まさか……！」

（『S』……。これが……僕の最後の一撃だ！）

次にガイの姿が見えた時、その牙は『S』の首筋に突き立てられていた。

だが、ガイの牙は『S』の皮膚に食い込む事無く、ただその表面でギシギシと軋んでいるだけだ。

「加速剤を持っていたとは……だが残念だったね。どうやら君の牙では私の皮膚は貫けないようだよ？」

「承知の上さ……狙いはそれじゃない！」

パキ！ つと何かが砕ける音がすると同時に、『S』が苦悶の表情を浮かべた。

「ファースト・ボーン！ 今、何を……！？」

「劣化促進剤を注入した……君は、もう生きられない！」

「そうか……今まで牙を使わなかったのは！」

「そう、口の中にしか入れておけないのでね……僕は」

「博士、無駄だ何て言わないで下さい！ 活性化しますから、もう少し頑張つて……」

何とかノイの傷口を塞ごうとするガイを制し、ノイは服のポケットからカプセルを一つ取り出した。

「もう時間が無い……これを……」

「これ……は？」

「分子結合の劣化を促進する薬品だ……これを『S』の首にある接続端子に入れる……。剥き出しになっているそこしか『S』に弱点は無い。あれの能力は全てにおいてお前を上回る……勝機は一瞬だぞ……」

「行け……ガイ……」

「ノイ博士が最後に僕に託してくれた武器だ……」

「愚かな……少量とは言え、君も摂取してしまったぞ！？ 私と心中するつもりかね！」

「それも仕方無い事だ……。このまま時を待てば全てが終わる……！」

「冗談ではない！ 放せ！ 私は生きる……私は……グアアアッ！」

『S』の身体に徐々に異変が現れ始めた。

体毛が抜け始め、爪や牙が、『S』がガイから逃れようと動く度に、まるで砂の塊のように崩れ落ちて行く。

加速剤によつて身体機能が加速されている今、その劣化も通常より遙かに早く進む……。

「り……理想の世界……。私の……私達の……」

「終わりにするんだ！ もう……悪夢はここで……！」

「嫌だ……嫌だぁーっ！ 私はまだ遂げていない！ 復讐を……兄弟達の恨みを晴らしていないっ！」

ラボで創られた『S』が起動した時に目にした物。

それは自分と同じ形をした者達が幾つも廃棄されている現実だった。

『F』を上回るように……全てにおいて優れた存在であるように。

そうやって何度も何度も研究を重ねられ、何体もの実験体の犠牲の上に生まれて来た存在……それが『S』と呼ばれる自分なのだ。

「私は……たった一人で耐えて来たのだ……。今日のこの日をどんなに待ち焦がれたか、君に解るのか！ ファースト・ボーン！」

『S』は崩れ行く身体を厭う事無く激しく暴れるが、ガイは渾身の力を振り絞って『S』を押さえ続ける。

ガイが力を込める度、リセルに撃ち抜かれた傷口からは血が噴出した。

「『S』……僕も一緒に逝く。君を独りにはしない……」

「あ……ああ……！ 身体が……身体が崩れる……私の身体が……ファースト・ボーン！ 助けて……助けて……た……」

『S』の尾が、右前足が、まるで石膏細工のように、血も流さずに身体から離れて砂塵と化して行く。

ガイは静かに口を放し、『S』の身体を横たえた。

「さらば『S』……もう1人の僕……」

「ガイが……どうして2匹も……？ しかも喋って……ガイが特別種……！？」

暫く呆然と事の成り行きを見ていたリセルが、やや混乱しつつ口を開いたが、やはり事態を飲み込めてはいないようだ。

ガイは細々した説明は省き、自分の伝えたい事だけを言う事に決めた。

「君の誤解だけは解いておきたい……博士を殺したのは僕じゃないよ」

「そう……みたいね……。それより大丈夫なの？ その……」

リセルは、自分で傷付けたガイの身体を見た。

素人にも傷の深さが判るほど、ガイは激しく出血している。

「そうだね……そんなに長くは持たないと思う。活性化したところで、劣化促進剤を摂取してしまった今となつては、逆に劣化を早めるだけから。でも、これでいいんだよ、きつと……」

「だめ……だめ！ 死なせない！」

リセルはガイに近付くと、その大きな身体を抱いた。

ガイは力無くリセルに凭れ掛かり、そのまま目を閉じ、身体を横たえた。

「結局……私は貴方を信じてなかった！ 家族みたいになんて思つてなかったんだ……私は……」

「……そんな事はないよ。小さい頃、リセルはいつも僕の傍にいてくれた……こんな風に優しく抱いてくれた……嬉しかったよ」

「ガイ……」

「僕はラボにいた頃から、ずっと探してた。父を、そして母を……。でも最初からいなかったんだ、僕は創られた者だから。それでも僕は見る事が出来た……父や母が遥か昔に駆けていた大地を……森を……。そして君に出会えた……満足だよ」

リセルは、ただ首を振りながら、ガイの話を聞いていた。
抱きしめる腕に力は込められない。

「S」のように崩れてしまったら……そう思つと恐怖心が湧いてしまう。

リセルがそう考えて「S」に目を遣ると、

「いない……？ ガイ！ あの犬がいない！」

「！？」

ガイが目を開き、視界の全てを使って「S」を探すと、ボロボロと崩れる身体を引きずりながら、メインコンピュータへと這い寄る「S」が見えた。

「『S』！ 何をする気だ！」

「知れた事……。創造が叶わぬなら……破壊するのみ……！」
「プラントを……反応炉を暴走させる気がっ！」

「灰塵と帰するがいい……呪われし我が身と共にっ！」

「よせ！ 『S』 ！」

ガイの静止を聞き入れる訳も無く、『S』は全ての動力を一気に最大にする。

まだ全てが完成してはいなかった反応炉は、すぐに悲鳴を上げ始めた。

「……ファースト・ボーン！ 見事その人間……護って見せろ。

護れなければ……私の……勝ち……だ……」

『S』はそれだけ言い残すと、身体の全てが崩れ落ち、砂の小山のようになって……。

「『S』……！」

ガイは崩れそうな身体を引き摺り、元は『S』だった物が使っていた端末を自分に接続した。

「コンピューターは……まだ生きてる！ 全回線接続！ 崩壊回避の可能性及び方法の想定！ ……最短脱出ルート検索！ ……崩壊までの時間想定！」

ガイはコンピューターに指示を出し、全ての可能性を弾き出す。

が、出た答えは否定的な物以外、何も無かった。

今から出口に向かったとしても、反応炉の爆発に巻き込まれずに済む訳が無い。

「くそっ……！ 何か無いのか……何か……！」

「ガイ……」

「……そうだ、シエルターは！？ シエルターまでのルート検索！」

【シエルターの完成度は現在60%。シエルター内での生存率は2%。別の方法を選択する事を勧めます】

「相変わらず融通の利かない奴だな！ いいから最短ルートを早く出せっ！ 直接、僕の脳に書き込むんだ！」

回避シエルターの全データを把握すると、ガイはよろめきながら立ち上がった。

「リセル、僕の背中に乗って！」

「そんな……無理よ！　だつて、そんなに……」

少しずつではあるが、確実にガイの身体は崩壊を始めている。
耳の先端や尻尾は、すでに崩れ落ちてしまっているのだ。

「グズグズしてる暇は無いんだ！　早く乗ってっ！」

ガイに怒鳴られ、リセルは恐る恐るガイの背中に乗り、その首に
そつと手を回した。

「大丈夫。身体はまだ崩れたりしないから、しっかり掴まってて」

「うん……」

「行くよ……！」

ガイの身体が輝き始め、やがて体毛の全てが銀色に変わると、頭
の中に書き込まれたシェルターへの最短ルートをガイは走り出す。

その時、プラント各部で爆発が始まった……。

ACT 6

【警告。 主反応炉の出力制御が出来ません。 炉内圧力上昇、爆発ノ可能性100%。 至急退避して下さい】

コンピューターの警告メッセージが、ダイレクトにガイの脳に伝わる。

情報はこの建物に触れている限り、無条件でガイの脳内に流れ込んで来る。

だが、それだけだ……。

「リセル！ 端末を僕の首の端子に接続して！」

ガイは通路にあるコンソールの前で立ち止まると、背中に跨るリセルに言った。

コンソールの脇からケーブルを引っ張り出すと、リセルはガイの長い体毛を掻き分け、その首筋にあるコネクタ部分にケーブルを繋げた。

「はい、繋いだわ！」

「まだ使えるといいが…… α 2 8 9 9 - 1 1 4 5 - Σ Z Z O R Q 8
8 - 0 1 ! エマージェンシー！ 『S』 をデリート！ 『F』
を最優先だ！」

コンソールパネルに 『F』 の文字が浮き上がった。

ガイの認識コードは、まだ生きていたのだ。

これで、このプラントのコンピューターは、全てガイの指揮下に置かれる。

【了解しました。 全管制システムは 『F』 を最優先します。
ご命令をどうぞ】

「よし！」

ガイは爆発によって出来た瓦礫の山を避けつつ、シェルターへと走り出した。

身体が徐々に思うように動かなくなつて来ている…… もう残され

た時間は少ないと、ガイは感じた。

「……見えた、シエルターだ！」

ガイはシエルターの前でリセルを降ろすと、解除キーを入力し、ドアのロックを外した。

「リセル！ 中に入って！」

「で、でも、このシエルターは未完成だって……」

「大丈夫、僕が何とかする！」

「ガイ……」

「全作業用動力を『F』を介してシエルターへ！……再生プログラム起動！ シエルターのみを集中修復！」

ガイが命令すると天井や壁からケーブルが伸び、次々とガイの身体とシエルターに勝手に繋がって行く。

どこからか低く唸る音が聞こえると、ガイの身体は細かく振るえ、全身の毛が逆立った。

「ム……ウ……！」

【了解。作業終了まで残り2分15秒05です】

「崩壊までの残り時間は？……大丈夫、間に合う」

「良かった……。さあガイ、中へ入りましょう」

だが、リセルの差し出した手をガイはすり抜け、リセルをシエルター内へ突き飛ばすと、そのまま扉を閉めた。

「完全ロック……手動による解除は無効に。自動解除は1週間後、

変更は……無い」

【了解。自動解除を1週間後に設定しました。『F』以外の

変更命令は全て無視されます。セキュリティシステム起動。シ

エルターは完全防御体制に移行します】

ガイの命令通りにシエルターのドア部分が頑丈にロックされ、数枚の合金が合わさったドアは完全に閉じられた。

『ガイ！ 何をするの！ 開けなさい！』

リセルは、中からモニタ越しにガイに叫んだ。
しかし……。

「シエルターに入る数は少ない程いい。酸素も水も、それだけ長く持つ。それに……」

『何を言うのガイ、開けなさい！……開けて！お願いだから！』

「それに、僕が中に入ったら修復が間に合わない。崩壊までは、あと2分しか無いんだ……」

『そんな……。だって……だって、さっき……ガイ！あなた嘘を……』

ガイは扉に背を向けて立ち、作業を続ける。

『待つて！それなら出口まで走れば逃げられるじゃない！あんなに速く走れるんだもの、外に出れば……！』

「無理だ、爆発の余波に巻き込まれてしまう。何より……」

そこまでの力は、もうガイには残されていないのだ……。

「傷を治している暇は無い……加速剤過剰投与！限界完全無視！全ての作業をシエルター修復のみに集中！シエルター周辺を完全シールド！隔壁閉鎖！自己修復モード最速に移行！」

【了解。シエルター修復以外の全てを無視します。加速剤注入開始。隔壁完全遮断。自己修復最速モードに入ります】

幾重にも重ねられた防御壁がシエルターを覆い隠す。

だが、それだけでは完全にシエルターを護る事は出来ない。

「もつとだ……もつと防御を厚く……もつとだっ！」

『ガイッ！』

「おおおお……うおおおおーっ！」

リセルの見つめるモニタ画面には、体毛が全て逆立ち、輝きがシルバーからゴールドへと変わったガイが映し出されている。

先程、自分が撃ったガイの傷口から大量の出血が迸るのを見て、リセルはたまらず画面から目を逸らした。

「ふふ……まだ僕の身体には血が流れているの……か……。人と同じ、赤い血……が……」

『ガイ……ガイ……』

「死なせはしない……リセル、君を死なせはしない！僕は君を護

つてみせる！」

『ガイ！』

「僕は……君を……」

『……！』

未だかつて無かった規模の爆発が起こり、高さ数kmに及ぶキノコ雲が湧き上がった……。

「酷いもんだな…… 10年前の時とは比較にならん規模だ」

調査団の一人が、その惨状を目の当たりにして呟いた。

この一週間の中和作業で、周囲の放射能は、ほぼ除去されていた。当然その作業を行ったのは人間では無く機械だ。

それでも調査団は全員スーツを着用している。

どこまでも臆病……いや、今の人類には、それだけの慎重さが求められているのだ。

種を絶やさない為に……。

「隊長！ 2 km先に生体反応！ 6つです！」

生存者の確認の為、周囲をモニタしていた隊員の一人が叫んだ。

「何？ そんなバカな…… ここはまだ本稼動前だったんだぞ！ 作業員の生存報告も無いというのに、こんな所に生物など…… 識別は！？」

「ここからでは…… あれ？」

「今度は何だ！」

いちいち不明瞭な報告に、隊長の男性はイライラして怒鳴った。

「生体反応消失…… いえ、1つになりました……」

「確認の必要があるな…… ここには2名だけ残り、他の者は確認に向かう！」

調査団一行が車を移動させ、反応のあった場所へと到着すると、そこには正方形のシエルターが完全な形で残されていた。

隊員達は全員が啞然とした表情でそれを見つめている。

「信じられない…… 10年前の規模でさえ、シエルターなんて跡形も無く消し飛んだのに……」

「目の前に現実がある！ 認識したら行動しろ！ 反応は？」

「間違いありません、反応はそこからです」

「生存者の救出を開始する！ 全員配置に……」

隊長の男性が指示を出そうとすると、バクン！ という音と共にシエルターの扉が開いた。

余程嚴重にシールドされていたのだらう、扉が開く際に周囲の部品の幾つかが一緒に飛び散った。

「開いた？ セットされていたのか…… おーい！ 中にいるのは誰だ！ 認識コードを言え！」

だが中からの応答は無い。

「反応は？」

「あります、生きてます」

「気絶しているか、自力で動けない状態か…… 装備の再確認はしたか？ 入るぞ！」

「…… 何だこれ？ オブジェか？」

隊員の1人が奇妙な形の石を触って呟いた。

それはどこかで見た事のある形だった。

「おい、何をしてるんだ。 さっさと中に入れ」

「あ、はい！」

隊員達がシエルター内に入ると、女性が一人、ベッドに見立てた箱の上に横たわっていた。

「ふむ…… 怪我や病気では無さそうだな。 君！ しっかりしろ！」
肩を掴まれ、身体を揺さぶられて、リセルは静かにその目を開いた。

今までは小さな照明だけだった為、外から差し込む光が眩しく感じられて、リセルは一瞬だけ目を閉じた。

「ん…… あ…… 扉が開いてる……？」

「大丈夫か？ 君の認識コードは？ いや、それより何故ここにいるんだ？ ここのスタッフじゃないんだろう？」

「何故……？ 私は……」

少し考えて、リセルの目がハッと開いた。

「ガイ！ ガイはっ！？」

「ガイ？ 誰か他にもいたのかね？」

「犬が……いえ、狼がいるはずなんです！ 私の大事な家族なんです！」

リセルが隊長にそう言うと、隊員達はみんな同情するような目でリセルを見た。

恐らく何かのショックで気が動転しているか、或いは発狂しているのだろうと。

今の時代に、民間人が犬など飼える訳も無いのだから。

ましてや狼など……。

「……ああ！ あれって犬だ、今思い出した。1度、シティのイベントでやってた、絶滅種の歴史つてので見たんだ」

隊員の1人、先程ドアの所で隊長に叱られていた男性が言った。

「見たんですか！？ どこで！」

「え？ ああ、扉の傍だけど、でも……」

「本当ですか！？ ああ……ガイ……無事だったのね、ガイ！」

リセルが外へ駆けだし、扉の陰を覗き込んで……その場にへたり込んだ。

そこにはシエルターを守るように、雄雄しく立ったまま石化したガイの姿があった。

「ガイ……」

リセルはそっとガイの身体を抱きしめ、その硬い身体に頬を寄せた。

「私の為に……私のせいで……！」

遠くで、ガイの遠吠えが聞こえたような気がした……。

Epilogue

僕は逃げた……暗い森の中を。

闇に視界を遮られる事など無い。

僕は、そう造られたのだから……。

別に不満があったとか、そんなんじゃ無い。

ただ、僕は見てみたかったんだ。

父さんと母さんが暮らしていた『自然』って物を……。

でも、小さな僕は遠くまで走れない。

例えばどんなに強く造られたとしても、例えばどんなに賢く造られたとしても、僕はまだ子供だったんだ……。

そして……僕は力尽きて倒れた。

深い闇が僕を包んで放してくれなかった……。

お願いだ……せめて……せめて一目だけでも……。

「おじいちゃん！ 仔犬がいるよ！」

「ん？ ……こりゃあ犬じゃない。ちょっと変わってるが、狼だよ」

「おおかみい？」

「純粹種では無さそうだな……だが、こいつはもうダメだ。こんなに傷付いていたのでは助からんだろう」

……誰？

「わたし連れて帰る！」

「駄目だ。自然の中に生きる者は、自然の中で死ぬべきなんだ。人が手を出すべきじゃない」

「ヤダ！ 絶対に連れて帰るうっ！」

「やれやれ……まったく、強情なのは誰に似たのやら。……仕方ない。その代わり、お祖父ちゃんの言う通りにするんだぞ？」

「うん！ ……あ、目が開いた！」

……この人間は……？

ラボの人間じゃない……？

「わたし、リセルっていうんだよ。よろしくね、ワンちゃん」

……リセル？

……この子の名前……？

「ワンちゃんではおかしかろう？ こいつは誇り高き狼だ、相応しい名前を付けてやらんとな」

「うゝん……じゃあ、ガイ！」

「ガイ？」

「うん！ この前読んだご本に出て来た騎士の名前なの」

「そうか、騎士か。それはいいな」

ガイ……？

僕をそう呼ぶのか、この子は……。

「さあ、ガイ。おうちに帰ったら手当てしてあげるから、それまで我慢するんだよ？ 騎士なんだから、それくらい強くなくちゃね」

そう言って、リセルは小さな手で、僕を優しく抱き上げてくれた。

それは10年前の事……。僕とリセルが初めて出逢った時の事……。

「……そして救助隊の人達に助けられたリセルは、大きな病院で手当を受けて、無事にお家へ帰ったの」

小さな山小屋のような家の暖炉の前でロッキングチェアに揺られながら、老婦人は静かに囁くように話した。

「おばあちゃん！ そのあと、リセルはどうなったの？」

老婦人の足元に纏わりつくようにして、期待に瞳を輝かせながら小さな女の子が言った。

その話しには、まだ続きがありそうな気がしたのだろう。

「普通に結婚して、普通に暮らして……幸せな一生を終えたのよ」

「ふうん……」

物語りの結末としては面白味に欠けたせいかな、女の子は多少不満そうな顔をした。

だが、もう話が続かない事を理解すると、それ以上何かを言う事はしなかった。

「さあ、もう遅いからお休みなさい」

「うん。明日もまたお話してくれる？」

「ええ、勿論」

老婦人の答えに満足して、女の子は「お休みなさい」と言って、自分の部屋へと歩き出した。

その後ろ姿を見送ってから、老婦人はゆっくりと椅子から立ち上がり、窓際へと歩いた。

そこから見える景色は、あの頃とは全く変わってしまった。

木々は生い茂り、星明りに照らされた緑の大地は、草花をその腕に抱えているかのようだ。

まだそれ程の力強さは無いものの、そこには確実に明日へ繋がる景色が広がっている……。

「お祖父ちゃん……海は、空は、限り無く蒼い色をしています。

あの頃とは何もかも違ってしまつて……けれど、これが本当の姿なのかしら？」

ふと視線を落とすと、外の闇の中に微かに動く影が5つ見えた。

「……元氣そうね、ガイ」

そこには外の闇と同じくらいに黒い体毛を持った犬が5匹、リセルをじつと見つめていた。

野犬と思われるその犬達に、老婦人は『ガイ』という名前を付けていた。

みんな同じ名前……けれど、何故か別々の名前を付ける気になれなかったのだ。

それ程に、その5匹は似ていたのだ……。

「あなた達にも聞かせてあげましょうね……ガイという名の騎士の話……」

5匹の犬達は暫くの間、老婦人の話しに耳を傾けているかのように、その場を動かなかった。

その惑星の海は昔、赤かったのだと云う……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4026a/>

-GUY-

2010年12月18日18時02分発行